

永文平和

石原莞爾自筆

第146号
(平成30年10月25日)

目次

巻頭言……………	1
これでもいいのか国民の選択 仲條拓躬	
◆理想郷「満洲国」創造 ―日中戦争と太平洋戦争―… 木下靖夫	2
◆石原莞爾將軍の 命日にあたり…………… 岡田恒良	4
●書籍……………	5
●SNS 会員便り	
●石原莞爾語録……………	8

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

これでもいいのか国民の選択

当会会長 仲條 拓躬



日本新党で参議院だった武田邦太郎先生が、

石原莞爾平和思想研究会において私に直接話されたことは「東亜連盟」誌の復刻版をインターネット上に掲載することと、「ピオトープ水田」及び「無農薬野菜」を作ることでした。私は武田先生に励まされピオトープ水田の代表などを行ってお米や無農薬野菜を作っていた。手賀沼をのぞむ通りで、自給自足を続けてきた。米の栄養に最適な手賀沼の水に加えて、谷津の深い縁がとも子どもの情緒教育に適していると思えた。だが、福島の子供の原爆発所の水素爆発が起

こり、ホットスポットとなった今、親が日常生活で放射線を浴びさせない努力をしているかどうかで、その子の将来に大きな差が出るのではないかと思う。

症状が出るのは、長年経ってからだから、すぐにはわからない。学校では、給食で地元の野菜や魚を地産地消といっている。原発からの放射性物質はいまだに検出されているし、数値も誤魔化している。たとえ基準値内という発表があっても「地産地消」は避けなければならぬ。レベル7の爆発事故で汚染された土壌からとれた作物が「健康に害がない」なんて誰が言いけるのでしょうか。「風評被害」とは何でしょうか。

風評とはウワサのこと。つまりはウソの汚染を心配して消費しない、ということ。程度の差こそあれ、野菜は汚染されている。私はピオトープ水田も無農薬の畑も断念しました。汚染されているのはまぎれもない事実です。それ

を「安全だ」といって強制的に子どもに食べさせることのほうが、本当の意味での風評被害だと私は考えます。不思議なことに、「安全宣言」を出しているところのほとんどは「何ベクレル」という測定値を隠している。

この度の総裁選では、原発問題が大きな争点になるはずでしたが、なぜか原発ではなかった。原発の問題を通じて、地方のあり方、政治のあり方、そして日本国の将来のあり方が問われているのだ。しかし、当座の利益を選択した。ネットでの一番の焦点は原発問題なのになぜか報道では経済問題となってしまう。

私は戦後生まれの世代であります。海軍中佐の祖父や石原莞爾將軍の身の回りの世話をしていた父から話を聞き、戦争の酷さ、理不尽さ、平和の尊さを直接教わりました。しかし、世代が変わるにつれて、戦争への危機感はずいぶん希薄になってきた。中国共産党や韓国から、不愉快な気分がさせられるほどの日本バッシングに対して、過剰に反応してしまう方も少なくないことでしょう。

目先の利益しか考えない、あるいは偏屈な愛国主義による投票行動は、冷静に考えてみると、不安定な雇用環境、劣化が止まらない年金、教育、医療・福祉など、未来が見えない中で、未来を感じさせてくれるのは東京オリンピックだけという寒い世情です。

しかし、美しい福島を、美しい東北を奪ったことに対し、エネルギー基地、食料基地として散々利用させてもらった東京都民には大きな責任があるはずでしょう。世界一の都市東京、日本国のけん引車東京、とかいうのであればなおさらだ。国民の選択はこれでもいいであろうか。

石原莞爾語録 其の五

「石原莞爾のすべて」(菅原一彪・仲條立一著)から石原莞爾語録をご紹介します。

単に観念上の問題に止まるならば、無学なわたくし如きものは沈黙を守るべきであるが私は「日本民族の指導権確立云々」の中に在満同胞敗戦の悲鳴を聞くので黙し難いのである。百万の精鋭無比な国軍は、厳として北滿に駐屯している。その後で指導権云々をいわねばならないのは、敗戦でなくて何であるか。生活戦線における敗戦の悲鳴である。民族協和は闘争と相互扶助の調整であり、生活戦線に敗北するものは協力に乏しい。私が満州にいた頃は、漢人は日本人の威力にひれ伏して恐怖の状態にあったが、昨今は日本人を甘く見ているらしい。日本人が漢人をつけあがると叫ぶのはたしかに事実である。私はそこに日本民族の敗戦を見る。

*在満同胞に訴う。

われらは、国共いずれが中国を支配するかを問わず、常にこれらと提携して、東亜的指導原理の確立に努力すべきである。この態度はまた朝鮮新建設の根本精神とも必ず結合し、調和し得るであろう。

*「新日本の進路。」

陸軍は、アジアの解放を叫んで、どうやら石原の察知するところでは、米英との戦争を企図

しているようすだ。その実は石油が欲しいのであろう。石油は米と妥協すればいくらでも輸入できることである。石油のために一国の運命を賭して戦争する馬鹿がどこにあるか。南方を占領したところで日本の現在の船舶では石油はよろか、ゴムも米も内地へ輸送できるものか。

ドイツの戦争を冷静に観察すると、地形の異なるバルカンで西部戦線と同一の戦法をとっている。現在ソ連でやっている戦法にもなら変化をみない。千篇一律の観がある。これではドイツはソ連には勝てない。

陸軍が力もないくせに、ドイツを頼って、米英を相手に戦うというなら、これほど大馬鹿で危険千万なことはない。極力戦争を阻止せよ。

日本は極力、独ソ両国の間に入って、両国の戦争をやめさせるよう外交的に努力すべきである。ヒトラーがもしこのことをきかぬならば、「それでは日本は英国の味方につく」と威嚇しても、ソ連との戦争を中止和解せしむべきである。ドイツがソ連に侵入してあれだけの戦争をしているのは、日本海軍が健在であるが故だ。日本海軍が太平洋の護りを固くしているため、アメリカの太平洋艦隊、イギリスの東洋艦隊がハワイとシンガポールに釘付けされているからだ。ヒトラーの実力を見誤ってはならない。ヒトラーの仲間入りなどして日本を亡ぼしてしまえるものか。ドイツの敵はイギリス一国だけ向け

させ、これを急迫し降伏せしむべきだ。もしこのことをヒトラーが用いないなら、決然、三国同盟を直ちに廃棄すべきである。

*以上は一九四一年七月、兵務局長田中隆吉少将に。

不幸なことには、東亜連盟は貴国の命令で解散させられた。東条も連盟を弾圧しようとしたが、東亜連盟は、朝鮮でも満州でも、また中国でも力強い勢力を維持し続けてきた。マッカーサーが東亜連盟を解散した時、われわれは、日本の軍国主義者とアメリカの軍国主義者とは、なんの違いもないことを知った。東亜連盟こそは、共産主義思想と対等の条件で戦える唯一の組織だった。

*アメリカの新聞記者、マーク・ゲインに。

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第145号 平成30年(2018年)10月25日発行